



古代中国の百科事典にある動物分類

古代中国の百科事典によると、動物は次のように分類される。

a)皇帝に属するもの、b)香に満ちたもの、c)飼いならされたもの、d)乳飲み豚、e)人魚、f)お話しに出てくるもの、g)放し飼いの犬、h)この分類体系自体に含まれているもの、i)逆上したもの、j)数えきれないもの、k)ラクダの毛のように細い筆で描かれたもの、l)その他、m)いましてが水差しを壊したもの、n)遠くから蠅のように見えるもの

分類軸があやふやなため、真面目なSEがデータベース化を試みるとかなり困ったことが起こる。

- ①複数の分類に含まれる動物の存在
- ②大分類と小分類が混在
- ③状況・文脈により、分類が変わる
- ④分類hに、a~nの動物すべてが入る

優秀なSEならば①から③を乗り切

るために、どうするか？ まず、固定した属性項目を持つDBは作らないだろう。代わりに各動物の説明文や現状の記述から、複数の自由タグを蓄積していく。そして、分類結果は状況や文脈に依存するので、検索時点でタグを使って分類処理を行う。

この方法は、先進的な文書・メール管理システムで採用例がある。各種目的で作成された文書群を、テーマ別や著者別、アクセス件数、時系列などの自由な切り口で再分類することで、新たな発見・価値

が生まれる。

問題④は、分類体系（テーブル）とその要素（データ）が同じ階層にあることが原因だが、実は混乱以上のメリットがある。この仕掛けにより「分類hに属さない」＝「この分類体系（テーブル）に属さない」が成立する。つまり、データ内部の言葉によってテーブルの外部を指すという、高度な表現を可能としている。人間の知能は、システム>DB>テーブル>データ といった階層を超えて思考

できるが、この特徴をDBが備えたと言える。

古代中国の分類はなぜ楽しいか？ それは異質な思考の枠組み¹⁾(≒分類体系)を持つものに会おうからだ。現在のWEBは、多数の主体が様々な目的で無秩序に情報を作っている。このWEBの全情報をシステムが処理できるデータに変換し、分類・体系

化しようという壮大な試み²⁾がある。その中では、言葉や概念の分類体系³⁾を作成し、共有化することが重要となっている。

ところで、古代中国分類に従って動物園の檻を困うと、捕食される動物がでるので要注意だ。

(外園 康智)



1) 哲学者ミッシェル・フーコーはエピステーメと呼んだ。
 2) セマンティックWEBと呼ばれ、次世代WEBと目されている。
 3) 概念のデータベース=オントロジと呼ばれる。